

劉文典による日中学術交流：重建懷徳堂訪問と『莊子補正』

稲森，雅子
九州大学文学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7337167>

出版情報：中国文学論集. 53, pp.134-151, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



劉文典による日中学術交流

——重建懷德堂訪問と『莊子補正』——

稲 森 雅 子

劉文典（一八八九—一九五八）は、中華民国期に清華大学教授をつとめた考証学者である。主要な研究成果として『淮南鴻烈集解』（商務印書館、一九二三年初版）や『莊子補正』（同、一九四七年初版）がある。これらはたゞたび重版され、前者は中華書局新編諸子集成、後者は同統編に入り、現在も研究の基本書と位置づけられている。また、青年期には留学も含め六、七年間日本に滞在した経歴を持ち、日本書の翻訳も複数手がけている。

研究においても日本に関心を持ち、一九三六年四月、大阪の重建懷德堂へ西村天囚旧蔵の楚辭百種閲覽に訪れたことは夙に知られている。一九三八年擲筆とされる『莊子補正』は、高山寺に伝わる旧鈔本を校勘の一助として参照しており、この時期に日本の旧鈔本を校勘対象としたことは注目に値するだろう。管見の限り、日本国内において、劉文典に関する論考は少なく、『莊子補正』の專論も見当たらない。本稿では、日中学術交流の観点から、劉文典の重建懷德堂訪問、及び『莊子補正』中の旧鈔本参照状況とその意義について考えてみたい。

一、劉文典略歴（重建懷德堂訪問まで）

劉文典の原名は文聰、字は叔雅、書齋名は松雅齋、一適齋、学稼軒など。^①安徽省合肥の商人、劉南田の三男として生まれた。幼い頃から私塾で経書を修め、十二、三歳の頃、教会のアメリカ人教師から英語や生物学を学んだ。一九〇三年に上海愛国学社（蔡元培主宰）へ入る。一九〇五年二月から安徽公学（陳独秀ら開設）へ進み劉申叔ら

の教えを受けて二年後に卒業。その後再び上海へ出て、教会で英語を学んだという。

一九〇八年、劉文典は日本へ留学する。早稲田大学で学んだと言われているが、その名を記した資料は発見されていない。^②この間、章炳麟の開いた学林社へ通い、『説文』や『文選』を学び、^④哲学や生物学にも関心を寄せた。一九一一年、辛亥革命が始まると上海へ戻り、民立社編輯部に入った。

二度目の来日は、一九一三年九月で、新聞記者の劉天民（または劉平子）と名乗った。翌年、中華革命党员となり、孫文の英文電報起草したこともあったという。その傍ら、『青年雜誌』などに論説や英文翻訳を投稿した。^⑤一九一六年、袁世凱が亡くなり上海へ戻った。

翌年九月、陳独秀の推薦により、北京大学の教員となる。その後、生物学の知識を活かして、丘浅次郎『進化と人生』、ヘッケル『生命の不可思議』等を翻訳、後者は一九二〇年に商務印書館より出版された。^⑥一九二二年六月、『淮南鴻烈集解』を書き上げたが、公刊の道は険しく、胡適へ何度も支援を要請するなどして、一九二三年十月ようやく商務印書館より出版された。また、この頃『莊子補注』の執筆を開始したという。

一九二七年十月、安徽大学籌備委員会委員に迎えられ、翌年四月、安徽大学初代校長に就任した。同年十一月二十八日、蒋介石が省都安慶を訪れて同大学を参観した際、劉文典は一行を出迎えずに不興を買った。^⑦しかも翌日の地方幹部会合では蒋介石と口論して罵声を浴びせ、その場で拘束された。蔡元培、胡適らの尽力により十二月五日、無事に保釈されたが、間もなく校長を辞した。

一九二九年二月、羅家倫に招かれて清華大学国文系教授に就任、北京大学教授も兼任して、文や賦などを講じた。一九三一年九月の満洲事変以降、日本の中国侵攻に関する論説や翻訳が現れる。^⑧一九三四年末に『莊子補正』初稿が完成、商務印書館の王雲五へ原稿を送ったが、出版交渉は不調に終わったようである。一九三五年二月、最愛の長男・成章が二十三歳で病没した。翌年四月、先述のとおり重建懷德堂を訪れて約二週間滞在した。

二、一九三四年清華大学旅行団の重建懷德堂訪問

劉文典の重建懷德堂訪問より二年前、一九三三年四月に同じ清華大学の外文系教授錢稻孫（一八八七—一九六六）率いる旅行団一行がここを訪問している（拙文「清華大学教授錢稻孫の重建懷德堂訪問記念写真について」、『懷德』第九一号、懷德堂堂友会、二〇二三年一月、四八—六四頁）。錢稻孫は、外交官の父・錢恂と中国女性初の海外旅行記『癸卯旅行記』の著者・単士釐の長男である。一九〇〇年、父の日本赴任に随って来日、慶應幼稚舎や東京高等師範学校附属中学などで約七年間学んだ。離日後、ローマ大学にも通った経歴を持つ。一九二七年より清華大学で日本文学や歴史、日本語を教えていた。留学中の目加田誠（一九〇四—一九四四）を自宅に寄寓させるなど日本人留学生を親身に世話したが、日中戦争中に日本設置の文化機関で要職に在った漢奸とされ、文化大革命中に生涯を終えた。翻訳に長じ、ダンテ『神曲』（部分）、『万葉集』や『源氏物語』などを手がけた。

筆者が劉文典について調査を始めたきっかけは、錢稻孫を含む集合写真（懷德堂記念会所蔵）であった。写真は、劉文典訪問時のものとして研究書でも紹介されてきたが、実は錢稻孫引率時のものであった。当時、清華大学で慣例の修学旅行のうち、一度きりの日本旅行で、教員三名を含む二十九名が、大阪のほか東京、横浜、日光、京都、奈良、宮島を二週間かけて巡った。参加学生は、曹禺（劇作家、本名『万家宝』）、孫浩然（舞台美術家）、吳宗濟（言語学者）、尤炳圻（翻訳者）、張君川（シェークスピア研究者）、柳無垢（柳亜子次女）、俞国华（台湾行政院長）など錚々たる顔ぶれである。『懷德』第十二号（一九三四年十月）に二ヶ所記事があり、四月十九日午前、重建懷德堂を訪れ、楚辞百種を閲覧、本堂前で記念撮影したとする。写真には、吉田鋭雄（一八七九—一九四九、重建懷德堂教授）、石濱純太郎（一八八八—一九六八）、濱一衛（一九〇九—八四、のち九州大学教授）らの姿も見える。後年、石濱純太郎は次のように回想している。

又或時錢稻孫先生だつたかが中國學生の修學旅行員を連れて堂を訪ねて、玄關前に皆を集めて解説しているのを見た。修學旅行のスケジュールに懷德堂はいっているなんかは我國でもあるかしらん。それが中國學生であるから驚きもしたが喜んだ。こんな調子の懷德堂は今言うならば中國文化センターであつたわけだ。

「懷徳堂を思出して」（『懷徳』第二八号、一九五七年十月、一一〇～一二二頁）回想談より、修学旅行の重建懷徳堂訪問は国内外を問わず清華大学一行のみであったこと、団長の錢稻孫が学生に解説していたことがわかる。このとき旅行を手配した日華学会の提案書に重建懷徳堂への訪問予定はなく、外務省への申請記録には懷徳堂ではなく「静安学社」と記す^⑬。従って、清華大学側が訪問先として、ここに事務所を構えていた静安学社を指定した可能性が高い。団長の錢稻孫は、圖書の受贈を通じて静安学社及び石濱純太郎を認知していた。一九三〇年元旦、日中学術交流促進を目指して自宅に日本語図書室「泉寿東文書庫（中国名＝泉寿東文書藏）」を開設した^⑭。満洲事変により実質上閉鎖されたが、その間に約四百人から四千三百冊余の寄贈を受け、北京随一の日本語圖書数を誇った。重建懷徳堂ゆかりの人物でここに寄贈していたのは、石濱純太郎と福田宏一（一八八五～一九三六）のみである。福田宏一は、大阪の寄贈窓口をつとめていた支援者で、石濱純太郎と義兄・藤澤黄坡が運営する泊園同窓会の会員でもあった。石濱純太郎は『泊園』と『静安学社報告』を寄贈している。その他、一九三四年四月以前、錢稻孫及び清華大学関係者と重建懷徳堂との関わりを示す資料は見当たらない。よって、錢稻孫が静安学社を指定したと思われる。

清華大学旅行団が重建懷徳堂で楚辞百種を閲覧した点、後述するように劉文典も訪問先を「静安学社」と記す点^⑮が符合することから、劉文典はこの旅行団員から情報を入手した可能性が高い。管見の限り、錢稻孫を除く教員や参加学生と劉文典との交わった記述は見当たらず、情報源は錢稻孫であったと推測される。劉文典と錢稻孫とはどのような関係であったのだろうか。

三、清華大学教授劉文典と錢稻孫

劉文典は清華大学の国文系、錢稻孫は外文系の所属であったが、両者は青年期の日本留学という共通点があった。劉文典には、当時の二人の関係を示す記述があり、『莊子補正』（諸偉奇・劉平章編、安徽大学出版社、二〇一三年。以下「増訂本」と略称）に収録されている。

(1) 「日本併呑各國之推進機黒龍會…在清華大學紀念周會上的講演」(第五冊・一七六—一八一頁)

講者自注……吾校教授錢稻孫先生是一位真正的日本通、藏書極富、同學要研究日本、最好是請教錢先生。

(拋『國立清華大學校刊』第三八〇号、一九三二年三月十一日)

(2) 「日本侵略中國的發動機」(第五冊・一八五—二〇〇頁)

我看見錢稻孫家東文書庫藏的『玄洋社史』上「頭山滿活動之目的」一章裏、說頭山翁之目的是在「指導朝鮮和支那」。書上兩處「指導」二字都是用小紙片粘上去的。……我把這部『玄洋社史』送還錢稻孫先生——

錢先生是中國今日唯一的「日本通」——檢出這頁給他看、錢先生也認為可疑、和我在清華大學圖書館裏、用溫水把這小紙片潤濕、再用小刀刮開來看、果然是「併吞」兩個字。

(拋『獨立評論』第十九—二〇号、一九三二年九月)

(3) 「日本名物」(第三冊「宣南雜識」六八一—六八二頁)

往歲偶與老友錢稻孫先生話及、先生云、嘉靖間謂之「急速」、萬曆間謂之「急須」、而日本人襲用萬曆時名稱、謂之「急須」。

(拋手稿、一九三五年執筆)

(1) では、錢稻孫は真の日本通で蔵書も豊富なので、日本について研究する際は教えを請うのが良いと述べる。
(2) は、劉文典が錢稻孫宅の「東文書庫」、すなわち泉寿東文書庫架蔵の『玄洋社史』に訂正貼紙を見つけ、錢稻孫と一緒に糊を外して、本来の文字を確かめた様子を述べる。上述のとおり、泉寿東文書庫は滿洲事変以降、公開休止を余儀なくされていたが、劉文典はその後もここを利用していたことになる。(3) では、日本語の「急須」の由来について語り合ったことを記す。これらの記述より、両者は親しい関係にあったことが窺え、劉文典が錢稻孫から楚辭百種の存在を入手し、関心を深めた可能性は相当に高いだろう。

四、一九三六年の劉文典訪日状況

劉文典は、一九三六年四月、清華大学で勤続五年以上の教員に付与される休暇制度を利用して、单身日本を訪れ

たと思われる¹⁹⁾。さきの錢稻孫一行は、日華学会や外務省に事前連絡をしており、これらの機関に資料が残っている一方、劉文典訪日に関する記録は見当たらない。

唯一、『懷德』第十四号に「▲劉文典氏 北平清華大學教授の同氏は昭和十一年四月十四日來堂二十六日まで滯留碩園文庫の楚辭に就て研究し、二十七日歸國せり」(『懷德堂記事』、懷德堂記念会、一九三六年十月、八六頁)との記録がある。このほか、石濱純太郎は後年「吉田北山先生」(大阪ことばの会編『大阪辯』第三輯、清文堂書店、一九四九年八月、一三八―一四三頁)²⁰⁾で次のように回想している。

もういつの時だったか確かな年月を覚えていないが、中華の學者劉文典叔雅先生が西村天囚先生の百騷廬の遺書を検閲しようと、遙々と遺書の藏つてあると聞く懷德堂を訪ねて來た。大阪へさえ來たら、有名な學問所だから直ぐ分ると思つたか、叔雅先生は大阪驛で下車すると、交番か警察で聞いたらしい。所が中々分らないので困つたと云う……然し、どこでどう教えて貰つて來たのか、兎に角叔雅先生は懷德堂まで着いたのだから、誰か知つていたと見えて少しは心強い次第であつた。

石濱の書きぶりから、劉文典は単身、かつ事前連絡なしに重建懷德堂を訪ねて來たようである。驚きをもつて迎えられることは想像に難くなく、関係者に強烈な印象を残したのであろう。

劉文典本人には、帰国間もない時期の詩二首がある。『国風』第八卷第十二期「詩録(一)」(国風社、一九三六年十二月、二七頁)に投稿されたものである。

靜安學會諸儒英招飲宴席上感賦 用山谷韻²¹⁾

讀騷作賦二毛作 騷を読み賦を作す二毛作

又訪奇書萬里行 又奇書を訪ねて万里行く

舟過馬關魂欲斷 舟 馬関を過ぎれば 魂断たんと欲し

客從神戸自來迎 客 神戸より 自ら來迎す

既知文物原同軌 既に知る 文物 原は軌を同じくするに

何事波濤總未平 何の事ありてか 波濤 総べて未だ平らかならず

劉文典による日中学術交流

記取今宵無限量

今宵の無限の意を記取して

還期相敬莫相輕

還た期せん 相敬ひて相輕んずる莫きを

詩題より、訪問先を静安学社と認識しており、歡迎の宴が催されたことがわかる。また、第四句には神戸で下船して案内人なしに訪れたことが述べられ、石濱純太郎の記述と符合する。第三・八句からは中国人としての毅然とした心持ちが感じられる。「山谷」は黃庭堅で、劉文典は王士禎『香祖筆記』卷八を参照したと思われる。康熙四十一年五月、李斯義は黃庭堅筆の詩「談經草檄鬢華生、初擁閩山傳節行。江入桐廬青欲斷、溪從劍浦碧來迎。茶雖戶種租宜薄、鹽不家煎價欲平。要使祈招歌德意、君恩不為遠人輕」の御臨書を下賜され、二年後、詩題が現実となり福建へ転任したとの逸話で、詩題は「送曹子方福建転運判官二首 其一」、作者は晁補之である。

過奈良弔晁衡并序

當年唐史著鴻文

當年 唐史 鴻文を著し

憐汝來朝讀典墳

汝來朝して 典墳を読むを憐れむ

渤海有知應念我

渤海 知有らば まさに我を念うべし

神州多難倍思君

神州 難多ければ 倍（ますます）君を思う

蒼梧海上沈明月

蒼梧海上 明月沈み

嫩草山頭看碧雲

嫩草山頭 碧雲を見る

太息而今時世異

太息す 而今 時世異なり

不修政教但興軍

政教を修めず ただ軍を興すを

序文には「民國二十五年春、余訪書日本京都大阪間、薄遊奈良、既覽春日神社大佛寺法隆寺二月堂諸勝蹟」とあり、「晁衡」（宣南雜識）、増訂本第三冊・六六九〇六七〇頁）にも「余嘗與日友林順二君往遊。值櫻花盛開、風日晴美……歸國後薄遊長安、寫呈張扶萬先生。先生熟精唐代中、日史事、方作唐代日本長安交通史、乃以此詩收入其中、許爲千載一遇之墨緣」とあり、京都へも訪書に赴いたこと、奈良を友人と觀光して阿倍仲麻呂へ思いを馳せたことが綴られている。詩からは、当時の日中関係への深い憂慮と、日本軍の中國侵攻への憤りが窺える。劉文典は、

この訪日中に高山寺蔵『莊子』旧鈔本（以下「高山寺本」と略称）の影印本を入手した可能性がある。

五、高山寺蔵『莊子』旧鈔本のあらましと研究状況

② 早期の旧鈔本影印としては、『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』十集全三十六冊（一九二二～四二年刊）が著名である。この頃、日本国内では古典籍の影印がさかんに行われるようになっていた。小島秋峰「影印本複製事業に就て」（『玉屑』第六冊、一誠堂玉屑会、一五～三二頁）より集計すると【表一】のとおりである。一部収録書名を割愛したものもあり不完全であるものの、およその傾向を知ることができる。影印対象は、鈔本に限らず刊本も含まれる。三百種以上もあるが、漢籍（朝鮮本、敦煌文書、仏典含む）は一四・四パーセントに過ぎず、日本人の書物が大半を占める。営利目的のものは少なく、二、三百部限定頒布が多かったようである。写真を用いたコロタイプ版、玻璃版などで、単色刷が主であった。

このような影印流行に沿う形で、外務省東方文化事業の一環として東方文化叢書が東方文化学院東京研究所より影印出版された。一九三〇～三七年の間に九種（『文鏡秘府論』、『礼記正義』、『春秋正義』、『莊子天運篇知北遊篇』、『莊子雜篇』、『玉篇』、『唐過所』、『毛詩正義』、『五臣注文選』）が出ている。

このうち『莊子雜篇』の底本となった高山寺本は、日本最古の『莊子』テキストと言われ、郭象注と古訓点（ヲコト点、仮名、声点）を付す。雜篇七篇（甲卷＝寓言篇第二十七、讓王篇第二十八、

【表一】1933年までの影印刊行状況一覧
（出典＝小島秋峰「影印本複製事業に就て」）

叢書名	編者名	総数	漢籍再掲
扶桑珠宝	佐々木信綱	39	5
前田家尊経閣叢刊	育徳財団	21	2
貴重図書刊行刊会		26	1
古典保存会叢刊	山田孝雄他	130	9
古簡集影	東京帝国大学史料編纂所	4	0
東方文化叢書	東方文化学院東京研究所	5	5
影旧鈔本	京都帝国大学文科大學	4	4
その他		110	23
合計		339	49

説劍篇第三十、漁父篇第三十一、天下篇第三十三。乙巻Ⅱ庚桑楚篇第二十三、外物篇第二十六から成る。いずれも奥書に年時や氏名等の記載はないが、字体の特徴などから、甲巻五巻は鎌倉初期の書写・加點、乙巻二巻は鎌倉後期書写・南北朝期の加點と言われている。江戸初期に高山寺の経蔵へ入り、現在は重要文化財として京都国立博物館に保管されている。

中国で初めて高山寺本の存在を記したのは、清末の楊守敬『経籍訪古志』で、巻五に十五巻を蔵する旨の記述がある。明治以降、日本国内で初めて言及したのは、神田喜一郎『旧書聞見録（中）』（『考古学雑誌』第五巻第九号、考古学会、一九一五年五月、五七―六一頁）であろう。本論は『遊仙窟』や『王勃集』などの旧鈔本約三十種を三回に分けて紹介したもので、高山寺本については一頁超の詳述がある。これを受け、武内義雄は「莊子攷」（『藝文』第九年第八号、京都文学会、一九一八年八月、一七―三七頁）を発表した。武内は、現行本との異なる実例を挙げ、郭象注以前の姿を考察するうえで有益なテキストであると述べたが、その後約十年間、学界に大きな動きはなかった。

一九三〇年、東方文化叢書第三として高山寺本の影印が始まる。一九三〇年十二月に四巻（庚桑楚篇第二十三、外物篇第二十六、寓言篇第二十七、説劍篇第三十）、翌年五月に三巻（讓王篇第二十八、漁父篇第三十一、天下篇第三十三）が出た。各篇一卷、卷子本の形のまま、紙背の書込みをも再現した精巧なものである（【図一】参照）。併せて狩野直喜『旧鈔卷子本莊子残巻校勘記』（東方文化学院、一九三二年二月）。以下「狩野校勘記」と略称）も出された。本校勘記は、本格的な研究の端緒として大きな成果物と言えよう。これらに呼応するかの如く、一九三一年十一月に文部省より京都国立博物館へ指示があり、丁寧な補修が施された。但し、さきの満洲事変及び翌年一月の上海事変により、一九三一年度刊行の影印本三冊と狩野校勘記の中国本土への寄贈は慣例通り行われなかった^{③〇}。東方文化事業部の北京人文科学研究所ですら同様の状況だっ



【図一】 東方文化叢書『莊子雜篇』（九州大学附属図書館蔵）筆者撮影

たようだ。一九三八年現在の『北京人文科学研究所蔵書目録』に「一組四卷」とあり、一九三〇年刊行分と同数が記され七卷揃っていない。

その後の国内における高山寺本研究は、主として典籍資料調査の一環として古訓点研究の立場からすすめられた。小林芳規「高山寺蔵莊子古訓点について」（池田末利博士古稀記念事業会実行委員『東洋学論集——池田末利博士古稀記念』、池田末利博士古稀記念事業会、一九八〇年、八五一～八七二頁）は、基礎的かつ詳細な研究である。次いで、高山寺資料叢書第十三冊『高山寺古訓点資料第二』（東京大学出版会、一九八四年。以下、「翻字本」と略称）が出版された。本書は影印・翻字訓読・訓読注・補注・索引・解説から成る。本稿は「翻字本」に拠る。^①

中国で最も早く言及したのが、一九三八年擲筆の劉文典『莊子補正』（初版『商務印書館、一九四七年六月、十卷五冊』）である。これに次ぐ論文は、王叔岷『跋日本高山寺旧鈔卷子本莊子殘卷』（『歷史語言研究集刊』第二二本、台湾国立歴史研究院、一九五〇年、一六一～一七〇頁）、「日本高山寺旧鈔卷子本莊子即成玄英疏本試証」（『国立台湾大学文史哲學報』第四期、一九五二年十二月、六七～七一頁）で、敦煌文書などとの比較検討もある。近年は謝明「論高山寺『莊子』鈔本的価値」（『敦煌學輯刊』二〇一九年第四期、蘭州大学敦煌學研究所、二〇、一一八～一二八頁）のほか、学位論文に寇寇「劉文典與『莊子補正』研究」（華中師範大学碩士論文、二〇一四年）、黃偉「劉文典文獻學成就研究」（安徽大學博士論文、二〇一五年）などにも言及があるようだ（二書未見）。

六、『莊子補正』への高山寺本参照状況

劉文典は、『莊子補正』において高山寺本をどのように参照したのであろうか。以下、増訂本をもとに確認する。劉文典の考証は、「○典案」の箇所で、「高山寺古鈔本治下有者字」（漁父篇、増訂本八五二頁）など、簡潔な記述が殆どである。なお、天下篇卷末に、先行研究者の狩野直喜と武内義雄に対する賛辞があることから、東方文化叢書を参照したと見られる。劉文典及び狩野直喜の高山寺本への言及状況を整理すると【表二】のとおりである。下段の狩野校勘記が総数四九二件であるのに対し、上段・劉文典は八五件で、数量は二割弱にとどまるが、狩野校勘記

【表二】劉文典『莊子補正』及び狩野直喜『旧鈔卷子本莊子殘卷校勘記』言及数一覧

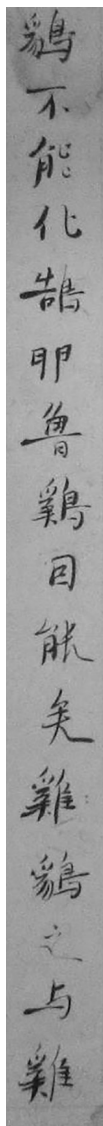
計	第三十三天下	第三十一漁父	第三十說劍	第二十八讓王	第二十七寓言	第二十六外物	第二十三庚桑	『莊子補正』	
								篇題	本文
1	0	0	0	0	0	0	1	注	計
68	11	18	5	16	4	4	10	劉独自(再掲)	『舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記』
16	10	0	0	3	1	0	2	本文	本文
85	21	18	5	19	5	4	13	注	計
8	4	1	0	0	0	2	1	計	篇題
4	2	0	0	0	0	0	2	計	本文
12	6	1	0	0	0	2	3	計	注
3	0	0	1	0	0	1	1	計	計
371	70	35	30	87	36	43	70	計	計
118	33	1	0	11	19	18	36	計	計
492	103	36	31	98	55	62	107	計	計

に記載のない箇所への言及(「劉独自(再掲)」は十二件ある。

上述のとおり『莊子補正』初稿が一九三四年末に完成していたことを勘案すれば、影印本及び狩野校勘記は、新資料として追加補助的に利用したのだろう。狩野校勘記を参照した証ではあるが、狩野が誤記したと思しき箇所は、劉文典も同様に記す。庚桑楚篇「越雞不能伏鵠卵：雞之與雛」(訓点本四五行、以下同)について、狩野は「宋本以下越雛作越雞、雛之與雞作雞之與雛。鈔本分別雛鵠、其義始晰。又化宋本以下作伏」(訓点本筆者以下同、四丁a)とし、劉文典は「高山寺

古鈔本越雞作越雛、雞之與雞作雛之與雛」と記し、「雛」を「雛」と作るとの指摘は一致する。しかし、翻字本は「鵠」(「雛」の異体字)と判読しており、こちらが妥当と思われる(【図二】参照)。また、讓王篇「時祀盡敬而不祈喜」(二〇二行)の「喜」を狩野(三六丁b)も劉文典も「熹」と判読したが、訓読本は「熹」(右傍記「サイワヒ」と記す。

【図二】東方文化叢書『莊子雜篇』庚桑楚篇四五行(九州大学九州大学附属図書館蔵)筆者撮影



他方、訓点の判読は難しかったようで、基本的に狩野校勘記に従っているが、見落しもある。天下篇「輪不蹶（於）地」（二三六行）に狩野が「各本無於字」とのみ記す（五六丁a）の対し、劉文典は「高山寺古鈔本作輪行不蹶於地」と記す。「行」字に見せ消ちがあることに気付かなかったのだろう。また、同篇「日請欲固置」（一一八行）に狩野校勘記は言及しないが、「日」を「日」とすべきとして「高山寺古鈔本亦正作日」と記す。しかし、右傍に「イ」とあり、「日」字が適当だろう。

旧鈔本は、宋本より原型を残す可能性があるものの、独特の訓点が含まれ、難解な事項も多い⁽³²⁾。しかし、劉文典は、出版間もない高山寺本影印及び狩野校勘記を考証に用いた。この点において、『莊子補正』は最先端の研究であったと言える。

七、『莊子補正』に対する王叔岷の批評

『莊子補正』にはどのような反響があったのだろうか。本書に約三ヶ月遅れて王叔岷『莊子校釈』国立中央研究院歷史語言研究所專刊之二十六（商務印書館、一九四七年十一月）が出版され、ここに早速批評が見られる。王叔岷（一九一四～二〇〇八）は、字慕廬、台湾を代表する校勘学者の一人である。四川大学から北京大学大学院へ進んで傅斯年（一九六〇～一九五〇）らに学び、中央研究院歷史語言研究所に入った。一九四八年、傅斯年に従って台湾へ渡り、台湾大学教授をつとめた。

王叔岷の批評は付録の「評劉文典莊子補正」（一九四五年初夏脱稿、手稿影印）で、劉文典の誤りを厳格に訂正している。冒頭で、劉文典より「旧稿莊子補正」が届き、大喜びして目を通すと「譌誤層出」「疑義：未發正者尚多」であったため、やむにやまれず「評劉文典莊子補正」を執筆したと記す。本書のもう一つの付録が「莊子校釈補遺」で、こちらは高山寺本と狩野校勘本に関する考証である。後年の回想では、狩野校勘本にも疏漏が多いことから、急遽「莊子校釈補遺」を執筆した、とする⁽³³⁾。『莊子校釈』本論の執筆時、王叔岷の所属する中央研究院歷史語言研究所には、高山寺本のうち一九三〇年度刊行の四巻しかなかったようで、戦後になってようやく傅斯年から北京

大学所蔵の影印全七巻が届いたという。傅斯年は、一九四五～四六年に北京大学代理校長をつとめており、この間に王叔岷へ届け、王叔岷はこれを受けて急ぎこの二文を執筆したと推測される。

王叔岷は、上述のとおり一九五〇年に「跋日本高山寺旧鈔卷子本莊子残卷」、一九五二年に「日本高山寺旧鈔卷子本莊子即成玄英疏本試証」を発表する。すなわち、王叔岷の高山寺本研究は、むしろ『莊子校釈』出版以降に本格化したようにすら見える。劉文典が高山寺本全巻と狩野校勘本を自在に参照し『莊子補正』で言及したのに対し、王叔岷は『莊子校釈』執筆時、高山寺本を十分確認できずに終わった。その不足を補う意図もあつて先掲の論文を執筆したとも考えられよう。後年、王叔岷の『史記』鈔本に対する研究心を熱くしたのは、『莊子補正』と狩野校勘本の存在もあつたのかもしれない。この点において、劉文典と王叔岷による莊子研究は、高山寺本影印本の活用事例であり、東方文化事業における日中学術交流の成果物の一つと言えるであろう。

おわりに

一九三七年七月、日中戦争が始まると、劉文典の自宅にも繰り返し日本人が搜索に訪れるようになった。翌年五月下旬、劉文典は北京を單身脱出して西南連合大学のある昆明へ逃れ、ここで『文選』や『莊子』を講じた。一九四三年十一月、かねて招請を受けていた雲南大学へ移り、文学に加え校勘学なども担当した。そして、この地で日本のポツダム宣言受諾を知るが、その後もしばらくここで講義を続けた。

一九四一年末、香港が陥落した際、劉文典に大きな不幸が襲っていた。北京脱出時に香港大学へ留め置いた蔵書が、同大学蔵書と共に接収され、東京上野の帝国図書館へ移送されたのである。一九四七年十一月、劉文典は、雲南大学総務処へ蔵書返還を申し出、大学は民国教育部へ上申、日本側もほどなく返送した。しかし、国共内戦の影響を受け、台湾へ移送されてしまい、今も台湾科技大学に収蔵されている^④。残念ながらその後の研究に、訪日成果を示す顕著な業績は見当たらない一因もここにあるのかもしれない。

中華人民共和国成立後も劉文典は昆明に留まって雲南省政府顧問に就任、大学教育に携わり続けた。晩年は『杜

甫年譜』の執筆に取り組み、一九五八年七月、波乱に満ちた生涯を閉じた。『杜甫年譜』遺稿は、二〇一三年に雲南人民出版社より公刊された。

清華大学旅行団の情報をもとに、劉文典は、楚辞百種調査のため、一九三六年四月、重建懷德堂を単身かつ突然訪れ、関係者に強烈な印象を残した。研究にその成果が直接反映されることはなく、劉文典にとっても最後の日本訪問となった。また、『莊子補正』には旧鈔本である高山寺本の影印と狩野校勘記をいち早く活用した。古訓点の判読は難易度が高く、精度にも限界があったが、新資料への挑戦であったことは確かで、これに触発された王叔岷により更なる研究が進められる契機となったのである。

注

- (1) 劉文典の経歴は、章玉政編『劉文典年譜』（安徽大学出版社、二〇一一年）を参照。
- (2) 管見の限り、留学生名簿（卒業者名のみを記すものが多い）に劉文典の名は見当たらない。どこかの学部に入學したものの卒業しなかった可能性がある。アジア歴史史料センター「6. 印度及清国留学生ニ関スル調査／分割1・2」在本邦各国留学生関係雜件／支那留学生ノ部 第一卷」（RefB12081646400及びRefB12081646500）、蔭山雅博「弘（宏）文学院における中国人留学生教育について（二）」『响沫集』五、学習院大学史学会、一九八七年三月、一一六～一八九頁）ほか参照。
- (3) 所在地は、小石川区小日向台町一丁目（現在の文京区小日向二～三丁目付近）。
- (4) 門下生に魯迅・周作人兄弟、錢玄同、許寿裳らもいるが、魯迅兄弟との邂逅はなかった。劉文典「回憶魯迅」（前掲『劉文典年譜』一九頁）。
- (5) イギリスの生物学者トマス・ヘンリー・ハクスリー（Thomas Henry Huxley）『Lay Sermons（信徒への説教）』の一節「On the advisableness of improving natural knowledge（中国語題＝近世思想中之科学精神）」翻訳（『青年雜誌』第一卷第三号、群益書社、一九一五年十一月）、「叔本華自我意思説」（同上第一号第四卷、同年十二月）など。

劉文典による日中学術交流

- (6) 丘浅次郎（一八六八～一九四四）は、当時東京高等師範学校教授。『進化と人生』は一九〇六年に東京開成館より出版、講談社学術文庫に収められている。ヘッケル(Ernst Haeckel)一八三四～一九一九)は、ドイツの動物学者、『生命之不可思議』の原題は“Die Lebenswunder”、日本語版『生命の不可思議』(大日本文明協会、一九一四～一九一五年)がある。このほかの訳本に、ヘッケル『宇宙の謎』(原題“Weltraum”)。日本語訳本『宇宙の謎』は有朋館、一九〇六年、丘浅次郎『進化論講話』(開成館、一九〇四年)がある。

- (7) 直前に起きた安徽大学学生暴動事件が背景にあるとも言われる。省立第一女子中学同校十六周年記念演劇公演を參觀しようとした男子学生が入場を断られたため暴動となり、学生が拘束された。劉文典は、公式に謝罪し賠償を約束していた。劉文典拘束までの経緯には流言も含め諸説あり判然としない。

- (8) 論述は「日本併呑各國之推進機黒龍會——在清華大學紀念周會上的講演」(『國立清華大學校刊』第三八〇号、一九三二年三月十一日)、「日本侵略中國の發動機」(『獨立評論』第十九、二〇号、一九三二年九月)など。翻訳は『日軍陸軍大臣荒木告全日本國民』(大公報館、一九三三年五月。荒木貞夫述『全日本國民に告ぐ』、大道書院、同年二月)、諸偉奇・劉平章主編『劉文典全集』第五冊(安徽大学出版社、二〇一三年)。

- (9) 九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」——一九三〇年代北京の学術交流』(中国書店、二〇一九年)参照。一九三四年十一月十一日より帰国までの間、錢稻孫宅に寄寓した。

- (10) 記事全文は以下のとおり。①「▲北平清華大學學生 中華民國北平清華大學々々生三十名は特に本堂所藏の楚辭百種閱覽のため四月十九日午前十時半錢稻孫教授に引率され來堂、大講堂に於て閱覽の後記念撮影をなし正午辭去せり」(懷德堂記事、四八頁)、②「▲四月十九日 清華大學々々生來堂 北平、清華大學の錢稻孫先生引率の下に男女學生三四十名、本堂參觀に來る。玄關にて記念撮影後、講堂に陳列の楚辭百種を觀て、正午すぎ、挨拶を交しながら去る」(本會記事。五一頁)。

- (11) 楚辭百種は懷德堂復興の主導者西村天囚が蒐集した楚辭関連書の総称で重要コレクションの一つ。町田三郎「天囚西村時彦覚書」(『哲学年報』第四二号、九州大学文学部、一九八三年、二七～五七頁)参照。

- (12) 石濱純太郎は、大阪堂島の製菓業者豊蔵の長男。十歳から漢学塾泊園書院の藤澤南岳に学び、東京帝国大学支那文

学科を卒業。義兄藤澤黄坡とともに泊園書院を運営する傍ら内藤湖南（京都帝国大学教授・東洋史）に師事。新設の大阪外国語学校に学び、一九二七年静安学社を創設、幹事となる（一九三六年六月）。著書に『支那学論攷』、『浪華儒林伝』等がある。蔵書等は大阪大学附属図書館蔵。関西大学名誉教授。

- (13) 「国立清華大学赴日觀察旅行日程表 九年三月十六日調製」（劉建輝編『日華学会高橋君平文書資料』Ⅲ、国際文化研究センター、二〇一五年、五五〇六〇頁）には、宝塚、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、大阪城とのみ記す。アジア歴史史料センター「滿支人本邦視察旅行関係雜件／補助実施関係第十四卷 10. 北平清華大学教授 錢稻孫及劉崇鑑 昭和九年三月三十一日」(RefB05015760100)内の旅程表は、いずれも「静安学社」とあり、重建懷德堂はない。なお、劉崇「鉉」が正しい。

- (14) 大阪大学附属図書館懷德堂文庫の西村天囚旧蔵書に錢学嘉『韻目表』があり、表紙裏に「錢念劬之贈」と記す。「学嘉・念劬」は錢恂（錢稻孫の父）の別称で、錢稻孫が父親と懷德堂の縁を認知していた可能性もある。

- (15) 拙著『開戦前夜の日中学術交流——民国北京の大学人と日本人留学生』（九州大学出版会、二〇二二年）第六章「錢稻孫の私設日本語図書室『泉寿東文書庫』」参照。

- (16) 泊園同窓会会員、斯文会会員。大阪福島の漢方医の家系。青年期に中国を遊歴、帰国後は飲食店経営。中国各地の名刹へ『大正新脩大藏經』寄贈を企画するなど日中交流に尽力、日中に幅広い人脈を持つ。新聞『泊園』第二五号「泊園異聞」（一九三七年一月、四頁）に追悼文あり。

- (17) 正しい書名は『玄洋社社史』（玄洋社々史編纂会、一九一七年）、七〇二〜七〇三頁。『字紙箋』に寄贈記録なし。

- (18) 増訂本第三冊・六七五頁、章玉政『劉文典年譜』（安徽大学出版社、二〇一三年）の一九三五年の項（二〇六〜二一九頁）ほか参照。「宣南雜識」は一九二〇〜三〇代前半の隨筆十七篇及び殘文一篇から成る。未公刊。

- (19) 「歴届休暇放洋教員一覽」（『清華同學錄』、國立清華大學校長辦公處、一九三七年四月、附録Ⅳ）の民國廿四年度（一九三五）の項に劉文典、錢稻孫ら十七名の名がある。錢稻孫は、包豐保夫人を伴い一九三五年七月より約一年間、東京千駄木などに滞在。夫妻の写真が『藝文雜誌』第二卷第一期（一九四四年一月）にある。

- (20) 『懷德』第四四号（一九七四年十月）に再録。このほか、武内義雄は「西村天囚」先生の歿後、中國の學者、劉文

典君が先生收藏楚辭をみんとて遙々大阪に來られたといふ一事を以てしても先生の楚辭百種がいかにか貴いものであるかが想像されよう」(「解題」、西村天四『日本宋学史』朝日文庫十二、朝日新聞社、一九五一年、二七六頁)と記した。

- (21) 増訂本の詩題は「静安學會諸儒英招飲宴席上感賦」(第五冊六頁)、初版『劉文典全集』(安徽大学出版社・雲南大学出版社、一九九九年)は無題。一句目「二毛作」、増訂本作「鬢華生」。六句目「波濤」、増訂本作「風波」。六句目「未」、増訂本作「不」。八句目「還期」、増訂本作「長期」。

- (22) 原文は「康熙四十一年五月、于保和殿頒賜御書、大理少卿臣斯義得臨黃庭堅書一幅其詩云『詩本文』」。四十三年十一月、李以副都御史遷福建巡撫前詩竟為之識云(上海古籍出版社、一九八二年、一六四～一六五頁)。

- (23) 晁補之『鷄肋集』卷十六(『四部叢刊初編』集部、[商務印書館]。同一詩句は『全宋詩』卷一三一五、程邁「送友福建轉運判官」にもある(北京大学出版社、一九九一年、一四九三頁)。

- (24) 増訂本の詩題は「過奈良弔晁衡 用温飛卿過陳琳墓詩韻」で詩本文のみを記す(第五冊五頁)。七句目「時世」、増訂本作「時事」。

- (25) 「学稼軒随筆 晁衡」(『雲南日報』一九四三年一月三十日、拠『劉文典年譜』二一九～二二〇頁)にも類似文があり、詩本文は「過奈良弔晁衡并序」と同一。張鵬一編『唐代日人來往長安考』「十三 玄宗朝之四」(秦風周報社、一九三七年三月、二三頁)に同詩が見える(一部文字異同あり)。

- (26) 林順二は未詳。同姓同名の陸軍大佐は、一八九四年山口県生、一九三七年陸軍大学校専科卒。外山操『陸海軍将官人事総覧(陸軍篇)』(芙蓉書房、一九八一年)ほか参照。

- (27) 張鵬一(一八六七～一九四三)は字扶万、陝西省富平生まれ。康有為の門下生。晩年、陝西省考古委員会委員長として西安碑林の保全に尽力した。編著に『太史公年譜』、『晋令輯存』などがある。

- (28) 『東方学報京都』第七冊(東方文化学院京都研究所、一九三六年十二月)に劉文典に関する記事はない。

- (29) 静永健『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』叢書出版始末小考(『文学研究』第一一二輯、九州大学大学院人文科学研究院、二〇一五年、一七～三二頁)ほか参照。

- (30) 外務省記録に「舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記ハ……漸ク本年二月至リ印刷ヲ了セシヲ以テ獻上并各方面へ寄贈セリ唯

支那方面へハ滿洲事變竝上海事變等ノ爲メ其發送ヲ一時中止スルノ已ムヲ得ザルニ至リシ事ハ頗ル遺憾ノ極ミナリトス而シテ複製本竝校勘記ハ先例ニヨリ凡テ殘部ハ書肆ニ托シテ廣ク販賣シテ研究者ノ參考ニ供スルコト、セリ」と記す（外務省外交史料館「1. 昭和六年度助成金一七〇八二五円 分割4、東方文化学院関係雜件ノ經費関係第三卷」Ref:B05015905000）。また『東方學報 東京』第二号「彙報 今年度古書複製事業」（東方文化学院東京研究所、一九三一年十二月、二九五頁）には『莊子雜篇』七卷を四〇円、狩野校勘記を二円で販売する旨の告知もある。

- (31) その他、專論に石山裕慈「高山寺本『莊子』の漢字音」（弘前大学教育学部紀要）第一〇七号（弘前大学教育学部、二〇一二年三月、七〜一四頁）がある。

- (32) 吉川幸次郎は、一九三七年十一月の講演で「附加された乎呼止點其の他、國語の翻譯部分が：古いテキストの形なり古い意義なりを證明する場合も、あまり多くはないが有る……かかる資料を利用することはわれわれ日本の支那學者の特權である、特權であると共に又義務である」と述べている（『舊鈔本禮記正義を校勘して——第九回開所記念日講演』、『吉川幸次郎全集』第十卷、筑摩書房、一九七〇年、四四四〜四四五頁。講演時期は永田知之「京都大學人文科學研究所の前身と中國典籍日本古寫本——寫本の複製を中心に」、『敦煌寫本研究年報』第十二号、京都大學人文科學研究所中國中世寫本研究班、二〇一八年三月、一五六頁注七〇に拠る）。

- (33) 王叔岷「二七、初到南京」（『慕廬憶往』、中華書局、二〇〇七年）六三〜六四頁参照。

- (34) 「戦時江南圖書『掠奪説』誕生の歴史的背景」（歴史学研究会『歴史学研究』七九〇号、續文堂出版、二〇〇四年、二五〜三二頁）、諸偉奇「訪劉文典臺灣藏書」（『江淮文史』二〇一三年五期、安徽省政協文化文史和學習委員會、八一〜八四頁）、黃偉「抗戰期間劉文典被劫圖書考述」（『北京化工大学学报（社会科学版）』二〇一四年第一期、同年三月、四七〜五一頁）参照。

※本研究は、JSPS 科研費 JP20K12947 の助成を受けたものです。